

3 妻木山地区谷部の発掘調査報告

—妻木晩田遺跡第10次発掘調査—

1. 発掘調査の目的と経過

本調査は妻木晩田遺跡第10次発掘調査である。妻木山地区の全体像を把握することを目的とする第1期内容確認調査の2年次に位置付けられる。

調査地点は、妻木山地区と妻木新山地区を結ぶ鞍部である。標高94.0m、緩やかな斜面と平坦な地形が約4,000㎡の範囲に広がっている(図1、図2)。この鞍部から東西2方向に、妻木丘陵と晩田丘陵を隔てる大きな谷地形が発達している。また、調査地点の南側には第1次発掘調査・妻木山地区4区があり、その北端部分でV-2期、V-3期の竪穴住居跡が検出されている。したがって、隣接する鞍部にも同時期の遺構が存在することが予想される。また、当時、谷部が道として利用されていたと仮定すると、この鞍部が妻木山地区と妻木新山地区、そして丘陵下を結ぶ往来の要所であった可能性も考えられた。

そこで、鞍部における遺構の有無、広がり、旧地形を確認するために4本のトレンチ(T1、T2、T3、T4)を設定した(図2)。調査期間は2003(平成15)年4月23日～11月28日である。

各トレンチの掘り下げは全て人力で行い、各堆積毎に順次掘り下げを進めた。出土遺物を層位別に取り上げ、時期決定に有効な土器の口縁部や特徴的な部位、石器、鉄器は出土位置を記録した。また、T2にみられる堆積を基本層序とし、各トレンチにおける層序の対応関係を検討した。そのさい、VI期～古墳時代前期の堆積とみられるT2・⑨層と、V期の堆積とみられるT2・⑩層、縄文時代の堆積とみられるT2・⑫層を鍵層とした。

遺物の取り上げ、遺構実測、測量にはトータルステーションを用いた。写真記録には6×7版一眼レフカメラを用い、35mm一眼レフカメラとデジタルカメラを補助カメラとして使用した。6×7版および35mm一眼レフカメラにはそれぞれカラーリバーサルフィルム、モノクロームフィルムを用い、撮影を行った。

また、トレンチの位置図作成、自然科学分析(トレンチ内の花粉、植物珪酸体分析、放射性炭素年代測定)をコンサルタントに委託した。自然科学分析の調査成果は平成17年度刊行予定の『史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告第Ⅱ集』に掲載する。

以下、各トレンチ毎に調査成果を報告するが、本文中

で使用する時期区分名称のうち、ローマ数字とアラビア(算用)数字の組み合わせによるものは、断りのない限り全て弥生時代を指すものである。また、図3、5、6、11に示した●は土器、■は石器、▲は鉄器を表し、それに付した番号(○-○)は挿図番号(図○-○)に対応する。

2. トレンチ1(T1)の調査

妻木山地区と妻木新山地区を結ぶ鞍部の南側緩斜面(妻木山地区)に設けたトレンチである(以下、T1)。等高線に直交する方向に3m×10mの調査範囲を設定した。調査地は南から北に傾斜しており、現地表面における南北高低差は約1.5mである。トレンチのすぐ西側から、妻木山地区と妻木新山地区を隔てる谷が西方向に延びる。

(1) トレンチ内の堆積(図3)

調査範囲には約0.2m程度の表土が堆積している。表土下にある②層(黒褐色土・Hue10YR3/2)からは、V-1期の口縁部片(図4-1)、時期不明の土錘(図4-2)が出土している。T2・②層との対応関係から、近現代の堆積と推測される。

③層(黒褐色土・Hue5YR2/1)はトレンチの中央部分から北よりに認められる薄い堆積である。堆積時期を示す遺物は出土していない。色調はやや褐色を帯びるが、土質・炭化物などの含み方から、T2・⑨層に対応する可能性が高い。VI期以降の堆積と推測される。

④層(暗褐色土・Hue10YR3/3)は⑤層、⑥層上面に推定される第1遺構面を覆う堆積である。図4-4が出土した。小片で時期の特定は難しいが、縄文時代後期中葉の縁帯文土器であろう。弥生時代の土器は出土していない。T2・⑩層または⑪層に対応する可能性が高く、いずれにしてもV期以前の堆積と推測される。

⑤層(黒色土・Hue7.5YR1.7/1)はいわゆるクロボクの堆積で、ローム層である⑦層上に堆積している。遺物は出土していないが、T2・⑫層と対応関係にある縄文時代後期を前後する時期の堆積と考えられる。

⑥層(暗褐色土・Hue7.5YR3/4)はトレンチ中央付近で一部⑦層上に堆積するが、トレンチ南半は直接基盤層を覆っている。北側には認められない。トレンチ中央付近で⑤層と重複しており、⑤層下の堆積であることがわ

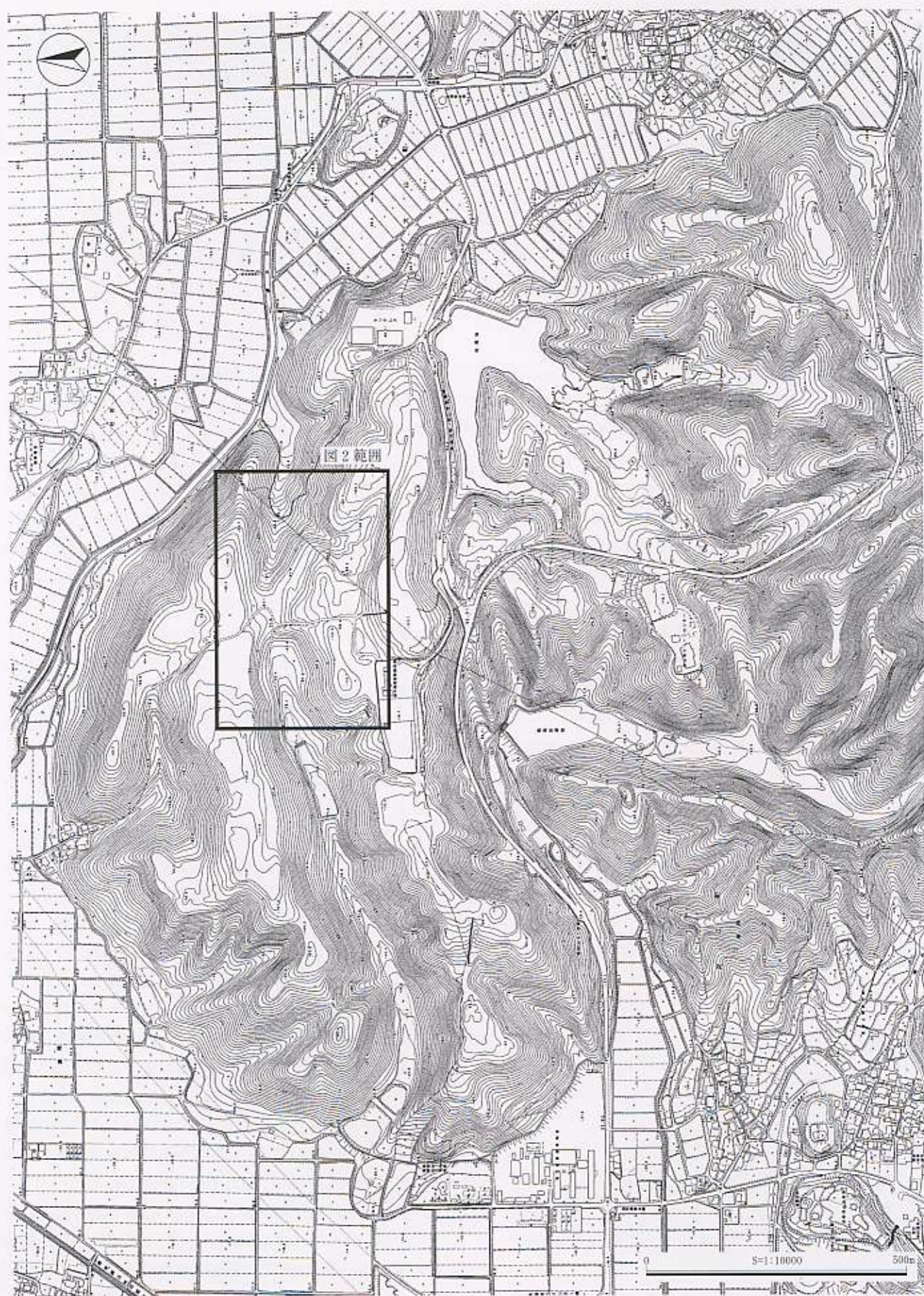


図1 第10次発掘調査位置図

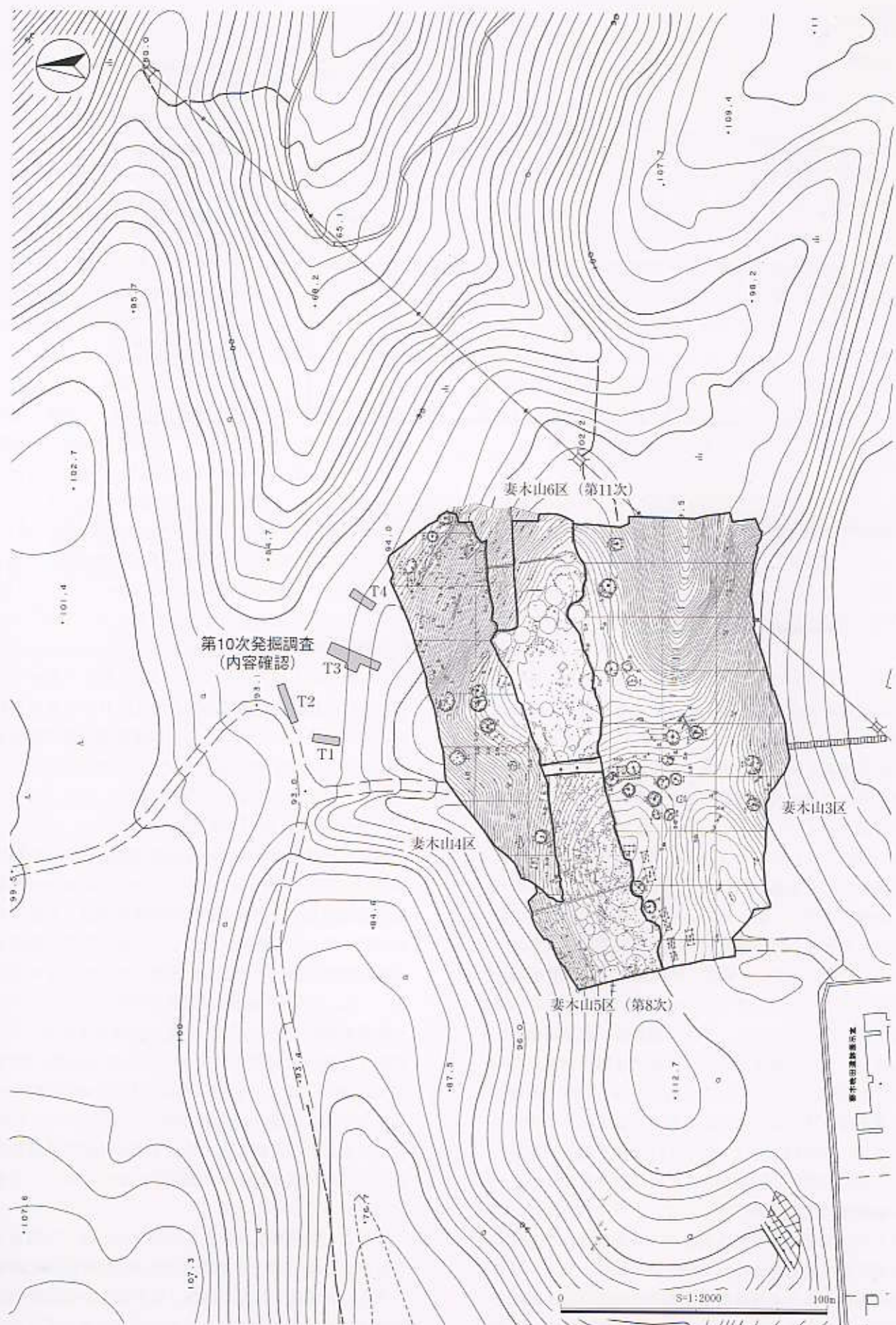


図2 第10次発掘調査トレンチ配置図

95.0m

A

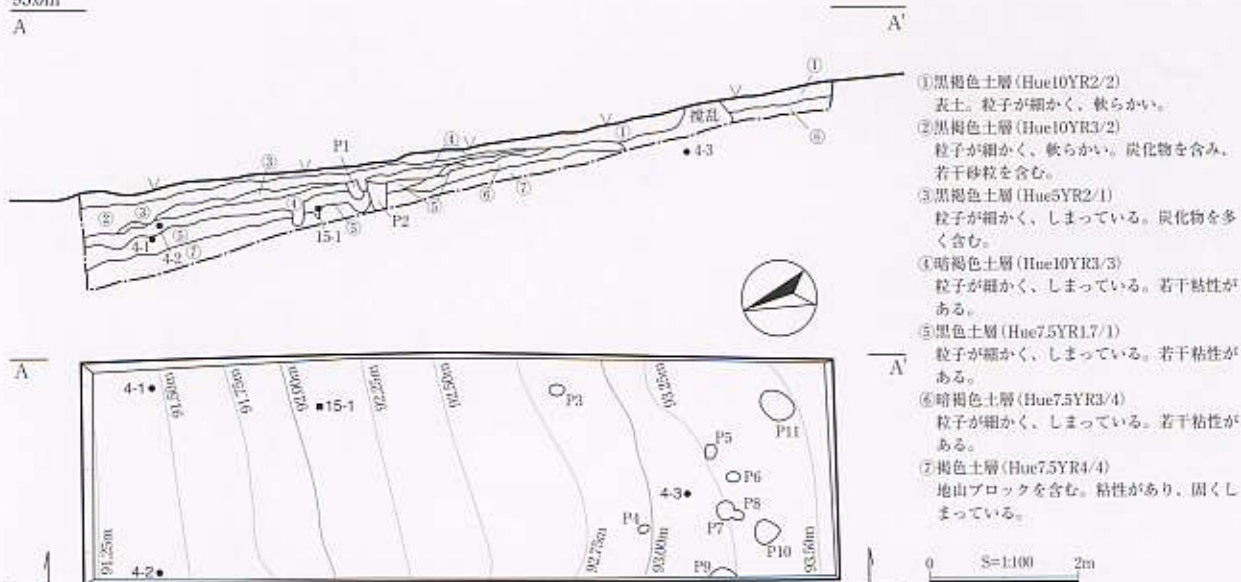


図3 トレンチ1

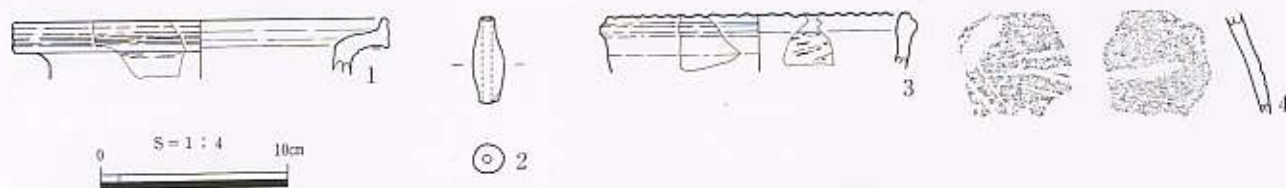


図4 トレンチ1および出土遺物実測図

かる。図4-3が出土した。縄文土器であるが、時期は不明である。

⑦層（褐色土・Hue7.5YR4/4）はいわゆるロームの堆積である。標高の高い南側には認められない。T2・⑬層に対応する。

(2) 遺構について

2面の遺構面を確認した。

第1遺構面（図3・表1）

トレンチ掘り下げの過程で、平面的に捉えることはできなかったが、トレンチ西壁、東壁に残る土層断面に⑤層を掘り込むピット（P2）の断面を確認した（図3）。④層に覆われることから、V-1期以前の遺構面と考えられるが、T2・第4遺構面または第5遺構面のどちらに対応するのかわからない。推定される遺構面の傾斜は現地表面よりもきつく、南北高低差は推定2m弱である。なお、P2の北側にあるP1は④層を掘り込んでおり、さらに上位に遺構面が存在した可能性もある。

第2遺構面（図3・表1）

さらに、⑤層、⑥層を除去後、⑦層上面および⑦層下にある火山灰層上面でピット群を検出した。ピットは標高の高いトレンチ南側に偏在するが、いずれも小規模で規則的な配置もみられない。⑤層、⑥層下にあることが

ら、縄文時代後期頃の遺構面と考えられる。遺構面の傾斜は、現地表面に比べてきつく、遺構面の南北高低差は約2.3mである。

3. トレンチ2（T2）の調査

妻木山地区と妻木新山地区を結ぶ鞍部の平坦な場所に設けたトレンチである（以下、T2）。3×20mの調査範囲を設定した。トレンチ周辺はほぼ平坦であるが、東から西へ向かって僅かに傾斜しており、妻木山地区と妻木新山地区を隔てる谷地形が西方向に発達している。

(1) トレンチ内の堆積（図5）

調査範囲には約0.2m弱の表土が堆積している。表土下にある②層（黒褐色土・Hue10YR2/3）、③層（黒褐色土・Hue10YR3/2）、④層（黒褐色土・Hue10YR3/2）はいずれも固くしまった堆積である。②層はトレンチ西側、③層はトレンチ東側に薄く堆積する。④層は互層状の堆積で、ほぼ③層に対応する範囲に広がっており、トレンチの西よりにはみえない。

トレンチの西側では②層、④層下に⑤層（黒褐色土・Hue10YR2/2）、⑥層（黒褐色土・Hue10YR2/2）が認められる。いずれも砂質に富む、しまりのない堆積である。⑤層から近現代の鉄釘やナットなどが少量出土した。一

方、東側には④層の下に堅くしまった⑦層（黒褐色土・Hue10YR3/1）が薄く堆積している。また、トレンチ中央部分には、④層と⑦層の下に⑧層（黒色土・Hue10YR2/1）が薄く堆積している。

以前、この場所は、里道として利用されており、その周囲は開墾された畑であったという。したがって、②層～⑧層は、そうした土地の利用に伴う造成等に関連する堆積ではないかと考えられる。

⑨層（黒色土・Hue10YR1.7/1）はトレンチの全面にほぼ水平に堆積している。V-1期～古墳時代前期の土器が包含しており、⑩層上面にある第3遺構面を覆っている。下層にある⑩層にはV-1期～V-3期の土器（図8）が包含されており、差し引きすると、⑨層はVI期を上限とし、古墳時代前期にいたる堆積と推測される。遺物はトレンチの西半分および堆積の中位から下位にかけて多く出土した。また、量は少ないが、古墳時代前期の土器が上位から出土しており、土器数小様式におよぶ期間、連続と堆積が続いたことを示している。しかし、土器の多くは小片で、著しく摩滅しているものもあり、周辺からの流れ込みと考えられる。

なお、掘り下げの過程で、⑨層中位で第2遺構面の存在を確認したが、⑨層を明瞭に細分することはできなかった。また、トレンチの東側に向けて堆積が薄くなるが、これは東から西に地形が傾斜していることによる。また、トレンチの東側は後世に削平を受けている可能性もある。⑨層の上に、古墳時代中期以降の堆積を挟まず②層～⑧層が堆積することは、このことの証左となろう。また、堆積時期を検討するために、土壌のサンプリングを行い、AMS法による放射性炭素年代測定を行った。

⑩層（暗褐色土・Hue10YR3/4）も東から西へ緩やかに傾斜する地形にあって、トレンチ全面に堆積している。V-1期～V-3期の土器が包含されており（図9-1～22）、⑩層上面にある第4遺構面を覆う。遺物はトレンチ内からさほど偏りなく出土しているが、小片で摩滅したものも多く、周辺からの二次的な堆積と考えられる。なお、堆積の上位からはV-1期～V-3期の土器が出土するが、下位からはV-1期の土器が単純に出土する状況が認められた。ただし、堆積を細別することはできなかった。V-1期～V-3期にいたる連続的な堆積と推測される。

⑪層（暗褐色土・7.5YR3/3）も東から西へ傾斜する地形にあってトレンチ全面に堆積しており、⑫層上面にある第5遺構面を覆う。⑩層に土質はよく似ているが、色調が異なる。遺物をごく少量包含しているが、時期の特定できるものは出土していない。上下の堆積との関係から、V-1期以前の堆積と考えられる。

⑫層（黒色土・Hue7.5YR1.7/1）はいわゆるクロボクの堆積である。⑪層下で検出した第5遺構面の基盤層である。ローム層である⑬層上に厚く堆積しており、トレンチ西側では厚さ1mにおよぶ。極少量の遺物が包含されていた。図10-23は唯一時期の特定できる土器片で、縄文時代後期中葉に位置付けられる縁帯文土器の口縁部片である。したがって、⑫層は縄文時代後期を前後する時期に始まる長期の堆積ということになろう。なお、堆積期間について詳細な検討を行うため、上下4カ所で土壌を採集し、AMS法による放射性炭素年代測定を行った。

⑬層（暗褐色土・10YR4/6）はいわゆるロームの堆積である。トレンチ東側では、⑫層を挟まず⑬層上に⑪層が直接堆積している。遺構を確認できなかったが、T1・第2遺構面、T3・第2遺構面に対応する遺構面が存在する可能性がある。また、⑬層上面は現地表面よりもきつく傾斜しており、東西高低差は約2.2mと推定される。⑬層上面で掘り下げを終えたため、その下層の状況は確認できていないが、これ以下では火山灰の堆積があらわれるものと考えられる¹⁾。

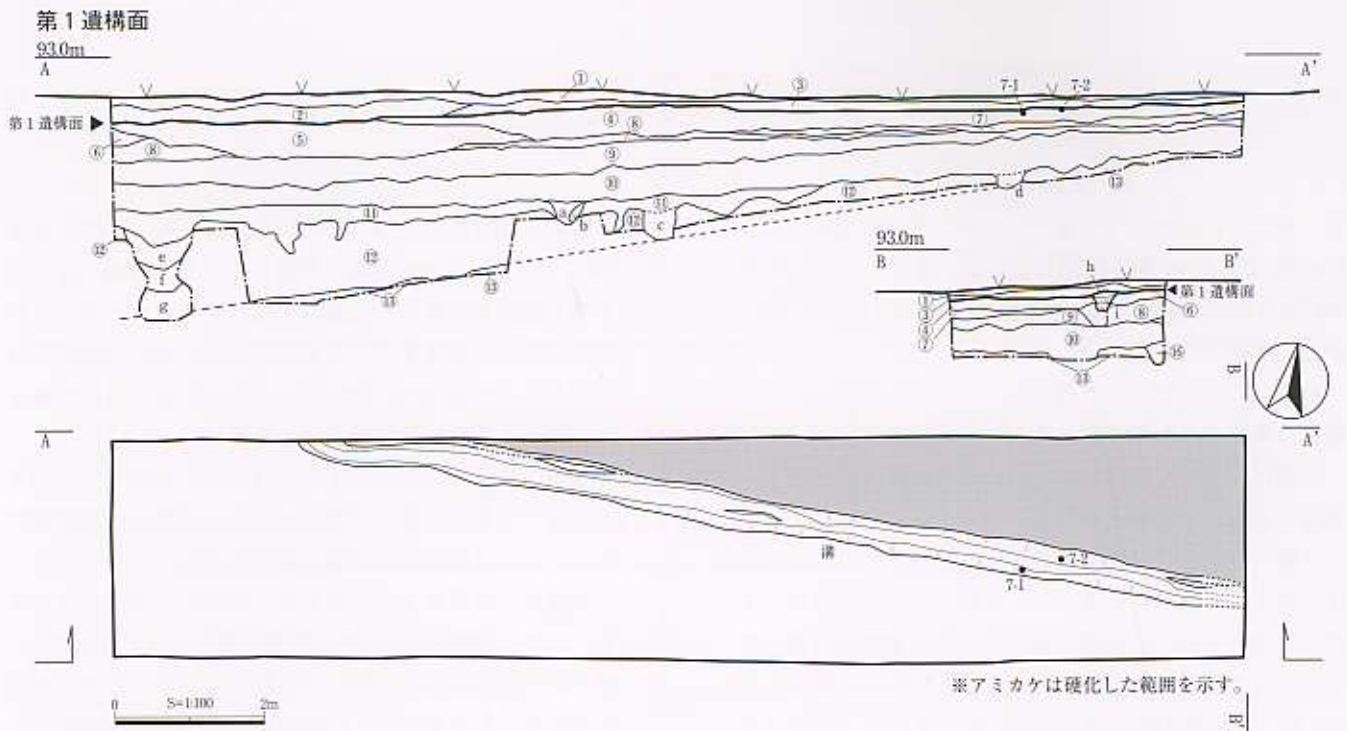
なお、古環境に関する検討を行うため、⑨層～⑫層の土壌を採集して、花粉および植物珪酸体分析を行った。

（2）遺構について

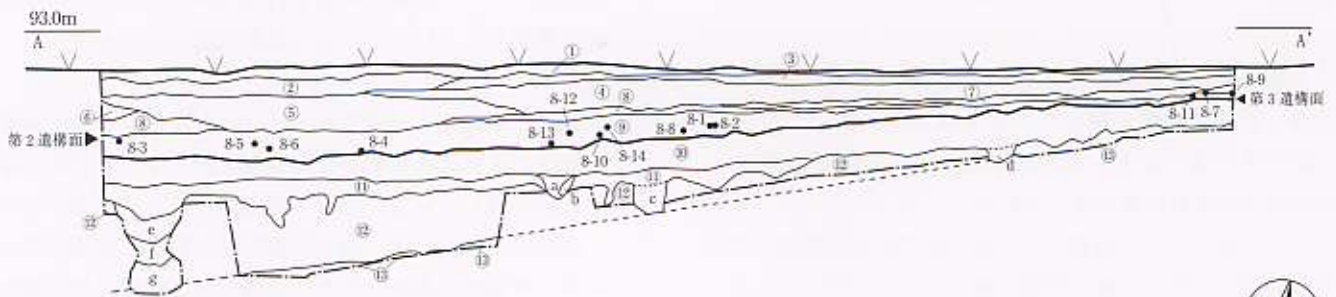
5面の遺構面を確認した。

第1遺構面（図5・表2）

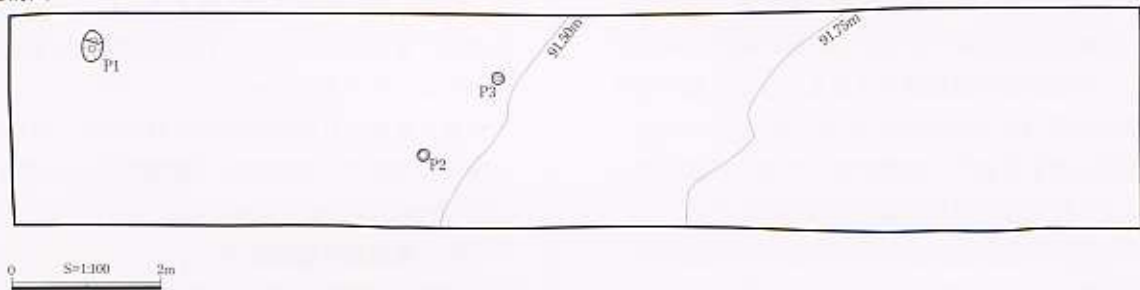
④層、⑤層、⑥層の上面に認められる遺構面である。東から西方向に延びる1条の溝を検出した。溝の検出規模は長さ12.7m、幅0.4～0.5mで、深さ0.3m、④層の南側に掘り込まれており、断面形は逆台形を呈す。また、④層は互層状の堅くしまった堆積で、その上面には顕著な硬化が認められた。里道として利用されていたことを考慮すると、④層上面の硬化は人の往来によって踏みしめられたものであろう。また、硬化面に沿う直線的な溝は道に伴う側溝と考えられる。溝の埋土中からはV期の



第2遺構面 第3遺構面 9層出土遺物



第2遺構面



第3遺構面

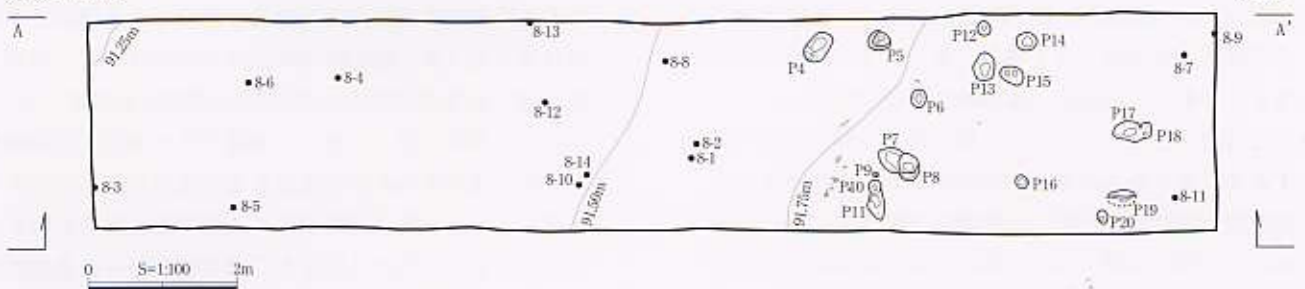
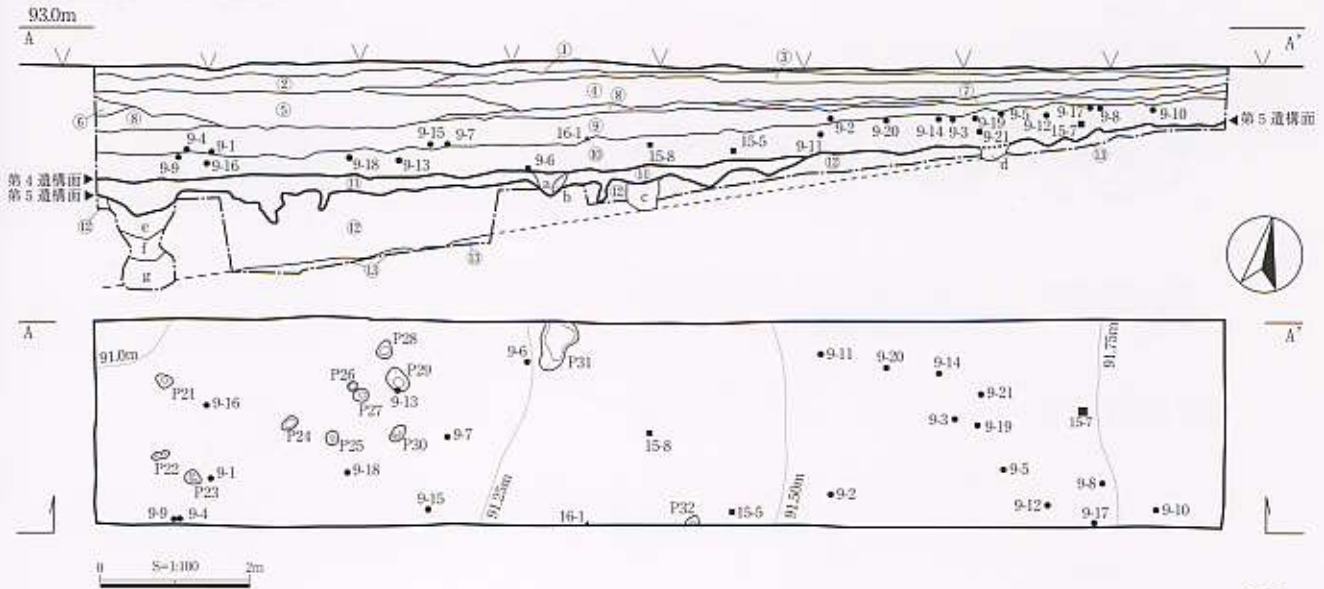
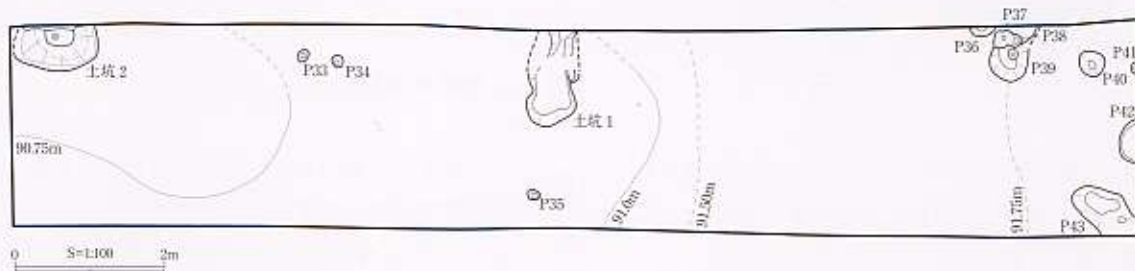


図5 トレンチ2 (T2) 第1~第3遺構面

第4遺構面 10層出土遺物



第5遺構面



- ①黒褐色土層 (Hue10YR2/2) 表土。
- ②黒褐色土層 (Hue10YR2/3) 耕作土。砂粒を含み、比較的軟らかい。炭化物を含む。
- ③黒褐色土層 (Hue10YR3/2) 粒子が細かく、しまっている。炭化物を含む。近代に道路として利用されていた可能性がある。
- ④黒褐色土層 (Hue10YR3/2) 砂質土(砂粒を含む)、褐色土 (Hue7.5YR4/6)、黒色土 (Hue10YR2/1)が硬く叩き占められて互層状になる。炭化物を含む。
- ⑤黒褐色土層 (Hue10YR2/2) 砂粒を多く含み、軟らかい。炭化物を含む。
- ⑥黒褐色土層 (Hue10YR2/2) 砂質で軟らかい。ブロック状の粘土塊、炭化物を含む。
- ⑦黒褐色土層 (Hue10YR3/1) 粒子は細かく、固くしまっている。若干粘性がある。炭化物を微量に含む。
- ⑧黒色土層 (Hue10YR2/1) 砂質で軟らかい。ブロック状の粘土塊を多く含む。炭化物を含む。
- ⑨黒色土層 (Hue10YR1/7/1) 粒子が細かい。遺物、炭化物を多く含む。
- ⑩暗褐色土層 (Hue10YR3/4) 粒子は細かく、粘性がある。遺物、炭化物を多く含む。
- ⑪暗褐色土層 (Hue7.5YR3/3) 粒子が細かく、やや粘性がある。遺物、炭化物を含むが、⑩に比べて希薄である。
- ⑫黒色土層 (Hue7.5YR1/7/1) 粒子は細かく、固くしまる。若干粘性がある。炭化物を微量に含む。
- ⑬褐色土層 (Hue10YR4/6) 粒子は細かく、固くしまる。炭化物を炭化物を微量に含む。
- a暗褐色土層 (Hue10YR3/3) 粘性が強く、しまっている。
- b褐色土層 (Hue10YR4/6) 粘性が強く、しまっている。
- c暗褐色土層 (Hue7.5YR3/3) 粒子は細かく、若干粘性がある。⑩とは分層が困難である。
- d暗褐色土層 (Hue10YR3/4) 粒子は細かく、粘性がある。遺物、炭化物を多く含む。⑩とは分層が困難である。
- e極暗褐色土層 (Hue7.5YR2/3) 粒子は細かく、粘性がある。炭化物を含む。
- f黒褐色土層 (Hue7.5YR2/2) 粘性があり、ややしまっている。炭化物を含む。
- g黒褐色土層 (Hue10YR2/2) 粘性が強いが、比較的軟らかい。炭化物を微量に含む。
- h灰褐色砂質土層 (Hue5YR5/2) 均質的な砂粒で構成されている。
- i褐色砂質土層 (Hue7.5YR4/2) 均質的な砂粒で構成されている。hと類似しているが色調が異なる。
- j灰褐色砂質土層 (Hue5YR4/2) 径0.2mm程度の砂粒を多く含む。

図6 トレンチ2 第4・5遺構面

高坏脚部片と時期不明の土鍬が出土しているが(図7-1・2)、第1遺構面下にある⑤層から比較的新しい時代のものとみられる鉄釘等が出土しており、近現代の遺構面と考えられる。

第2遺構面 (図5・表2)

⑨層掘り下げの過程で部分的に検出した遺構面である。トレンチの西半分に小規模なピットが認められる。しかし、第2遺構面に対応する堆積を明確に分層できたわけではなく、面的な広がり捉えることはできなかった。したがって、図5第2遺構面の東半分は、⑨層中位でそろえた地形を第2遺構面と仮定したものである。なお、⑨層上位の堆積には古墳時代前期の土器が含まれており、

第2遺構面の時期を示唆するものと思われる。

第3遺構面 (図5・表2)

⑩層上面で検出した遺構面である。東から西に向かって緩やかに傾斜しており、東西の高低差は約0.8mである。最も標高の高い東側にピット群が認められる。ピットはいずれも小規模で、規則的な並びは確認できない。第3

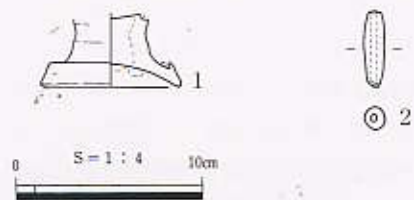


図7 トレンチ2出土遺物実測図(1)